

「自伝小説」

わが道を求めて (第十三回)

父母の家庭教育

長崎 明

さしえ 竹内秀明

水泳の特訓

父の手を離れた瞬間、私の小さな身体は奈落の底に落ちるかのように、海底へと沈んで行った。どんなに手足をばたつかせ、もがけども、もがけども、身体は浮き上がらない。小学校四年の私の身長わずか一一五センチ、体重二十キロ、それが沈むだけ。そのときの恐怖感。今も忘れられない。

父がすっと手を伸ばして身体を掬い上げてくれた。そのときの安堵感。「見ろ、こんなに浅いんだぞ。お前だって背が立つくらいなんだ」

ほんとに海の深さは父の臍ほどもない。

そして、私の身体は再び父の手を離れて海の中へ抛りこまれた。これが父の手による初めての水泳の特訓であった。

父は五歳のとき橋から川に落ちて、もがいているうちに何とか岸に泳ぎ付いた。「水泳は自分で泳ぐ気になって初めて習得できるものだ。依頼心のあるうちはだめだ」というのが父の主義であった。

私は海が好きだ。しかし、それは海辺、海岸が好きなのであって、海の中はおどろおどろしくて、恐怖感が先に立ち、今でも好きになれない。今年も二、三回五十嵐浜に行ったが、おおむねは海岸でひなたぼっこをして、たまに海へ入っても、泳ぐよりは波と戯れているだけである。

父は自分の経験からして、子どもに万一のことがあった場合、自分で自分を助ける力をつけておいてやりたい、さらに、その能力も自分で体得させたい、と願っていたようである。

一九三三年（昭和八年）当時、いかに植民地の台湾でもプールのある学校はなかった。水泳の練習は川か海でしか出来なかった。まして頂双溪はほんの片田舎に過ぎないし、おまけに街の近くを流れている双溪川

は小さな急流で、泳ぐどころか、遊ぶことも出来なかった。

その頃の父は割合に家庭サービースに気を配っていたらしく、毎年夏休みを利用して家族ぐるみでキャンプに連れて行ってくれた。尤も、家族だけでなく、公学校や小学校の若い独身の女の先生も一緒のことが多かった。父はまだ三十歳そこそこではあるが、妻子ともどもキャンプだから別にどうという事もないし、私にとっては先生と一緒に親しみもあった。

キャンプの行く先はほとんど例の澳底に限られていた。ここは頂双溪から十キロ足らずの海岸で、双溪川が運んだ砂が中洲を造っており、太平洋に直接面しているが穏やかな浜辺を成していて、家族連れのキャンプには持って来いのところであった。また、ここは北白川宮を团长とする台湾征定軍が明治二八年に上陸した由緒ある海岸でもあった。

しかし、海に投げ込まれた私にとって、そんな事はどうでもよかった。どうやったら浮き上がれるのか、会得しようにも思うに任せないのだから、水泳なんて真っ平だとの意識が先に立って、ますます意欲を無くしてしまった。

今になって考えてみると、浮き上がらないのが当然

だったかも知れない。先ず第一に、父が「やってみろ」とばかり手を離すのだから、離される前から身体に力が入ってカチンカチンになっている。第二に、海に入られる前に息を吸ってなければならぬのに、手を離された途端に「あっ」とばかり吐いてしまった。二年後、台北の大きな小学校に転学してからの身体検査で分かった事なのだが、私の肺活量は普通の人の半分しかない。多分生まれて間もなく重い肺炎を患ったためであろう。二十歳の兵隊検査のときでさえ一八〇〇しかなくて、何回もやり直しをさせられたが、何回やっても同じなので検査官が呆れてしまった。そんな小さな肺に息も吸い込まないで水の中に入って浮くわけがない。第三に、せっかく肺に入った僅かばかりの空気を、身体を固くして押し縮めるのだから、物理の法則からして浮力がつく筈がない。第四に、水中でもがく際に、水を掻き分けるように両手を開く時に力を入れるから、沈みこそすれ浮くわけはなかった。いずれにしろ、理屈ではそうだとしても、父の言うように、泳ぎは体得すべきもので、理屈が分かったからといって泳げるわけではない。それが証拠に未だに私は泳げないのである。

獅子は我が子を鍛えるのに千仞の谷底に落とすとい

う。父もその故事に倣ったのかも知れないが、いかにせん、人間は獅子のようにには行かなかった。私は、私自身が子どもを育てる段になって、どちらかといえば放任の道を選ぶことになった。これは別に主義というほどのものでなく、仕事の忙しさにかまけて楽な方に傾いてしまったというべきか。

暗闇の家族試胆会

先日テレビを見ていたら、ある進学塾で生徒の精神修養のため、授業に瞑想をとり入れているという。塾長の話によると、瞑想によって脳波をアルファ波の状態にもって行くと、とても良い気持ちになって、自分が自分以外の次元から自分を見つめる事ができるようになり、自分自身どこへでも、どんな物体でも通り抜けて、三次元にも四次元にも、存在する事が出来るのだそうだ。これを「幽体離脱」というとか。

実は私は子どもの頃から、自分の精神をこういう状態に出来ないかと、何となく憧れていた。写真を撮ったり、自分の後ろにもう一人の自分の影がぼんやりと写っていたとか、真っ暗な部屋で手足を縛られ目隠しをされているのに机を動かす事が出来るとか、いわ

ゆる心霊術なるものいささか関心を持っていた。

母が夢中になって私を叱っているのに、その母と私とを別の私が別の世界から眺めたらどんな気持ちがあるだろうかと思像してみたり、羽根もプロペラもないのに高い空をスイスイと飛び回りながら、家の庭で遊んでいるもう一人の自分を眺めている夢を見たり、といった調子である。夢の中で、大空に舞う赤・青・黄色・白、様々な色の何百という奴隷の間を悠々と遊んでいた自分の姿を、目覚めてからはっきりと思い起こして、もう一度夢の世界に戻りたいと瞑想してみた事もある。しかし、そういう時には大抵寝小便を垂れていて瞑想どころではなかった。そういう夢を見るのは小学校卒業までだったが、寝小便の方は中学校まで続いた。膀胱が小さいのか、括約筋が緩いのか、現在なお一晩に二、三度小便に起きる習慣は治らない。

そのくせ臆病で暗いところが大嫌いだ。今でも好きではないが、暗い便所にもそれほどおっかながらずに行くことが出来るようになった。私の臆病は多分に母ゆずりであろうか。母も暗いところは嫌がって、とりわけ父が宿直の晩などは家中の電灯をつけっ放しにしていた。

父は、そんな母や私の臆病をなおしてやろうと思っ



ての事だろう。夏の夜、とりわけ月のない真っ暗な夜を選んで、しばしば家族だけの試胆会をやった。公学校官舎は小高い丘の中腹にあり、その丘の上は平になっていて、そこに台湾の人達の古くからの墓地があった。父はその墓地に行くと奇麗な星空が見えるから、星座を教えてやろうと言って、夕暮れ時から晩飯持参で出かけようと計画するわけである。一番嫌がるのは勿論母のだが、星座の勉強との大義名分の前には、あえなく屈せざるをえない。子どもは正に屠場に引かれる羊のごとくである。

その頃の台湾の墓地は土葬であった。太い木を繰り抜いた丸木舟のような棺に死者を寝かせるか、大きな甕にしゃがませるかして一旦埋葬した後、もう一度掘り出して骨壺に入れ、廟に祀るのだと聞かされた。だから骨の中の燐が燃えて青白く光り、人魂となってフワフワと飛び回るのだとの話も真実と思えた。父はそんなところで夕食をとりながら星座の勉強をしようというのだが、母と子どもにとっては飯や屋どころではなかった。星座のいくつかを習ったのは事実だが、天の川、白鳥座、北斗七星、スバルくらいしか覚えていない。

たそがれどき、墓地の真ん中にござを敷いて、持参の食事を並べる。何を食べたか、覚えてもいない。まわりのそちこちに土葬の塚が、もっこりもっこりと群がっている。あの一つ一つに死体が生のまま埋められていると思うと、背筋がぞくぞくとしてくる。父は殊更に意に介する素振りを見せず、「うまい。うまい」と大口を開けて食べて見せる。やがて日が落ちると真の闇が迫ってくる。人工の灯り一つない真つ暗闇がどんなものか、現代人には想像も付かないだろう。

タンゴに「星はまたたき、夜深く、なりわたる、なりわたる、プラットホームの別れのベルより」とい

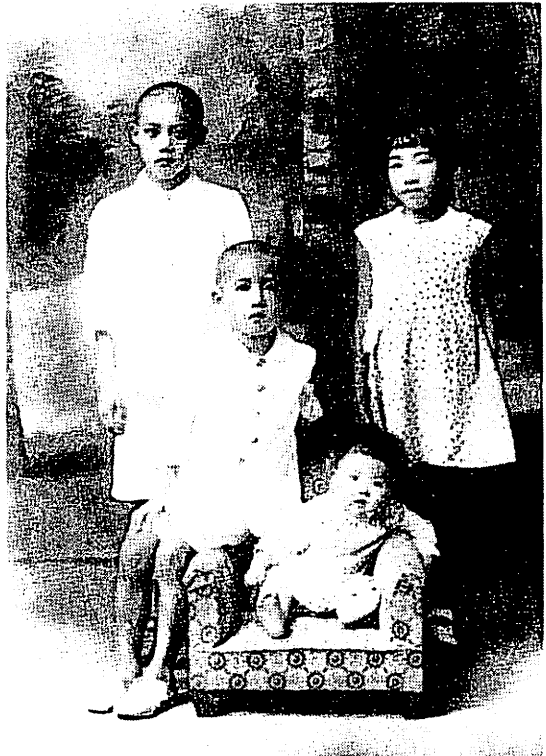
うのがあるが、そんなものではない。プラットホームにはたとえ薄暗くても灯りがあるだろう。プラットホームの灯りのもとの星のまたたきは詩にはなっても、真つ暗闇の墓地の星は降るように迫ってきて、子どもに怖れおののきをもたらずだけである。

試胆会で肝が太くなるどころか、ますます弱虫で臆病な私になってしまった。

もう一つ、こんなことがあった。

頂双溪は竹の名産地で、まっすぐ四、五メートルにも伸びた真竹を夜露に当てるで漂白し、物干し竿として輸出していた。街から駅までの道の両側には、漂白のために数十本ずつにまとめられた生乾き・漂白途中の竹の束が、所狭しと並べられていた。

ある夜、ふと私はアイスキャンデーが食べたくなって、つい口に出してしまった。聞き付けた父が「それなら、駅まで行って買ってこい」と命じた。家から駅までは一キロ以上もあったらうか。そこは竹の束が突っ立っているだけで人家はなく街灯もまばらである。私は夜道の怖さが先に立って半べそをかきながら、それでも、自分が言い出しておきながら撤回して父に叱られる怖さと、アイスキャンデー食べたさとの板挟みになって、しばらくグズグズしていたが、意を決して玄



関を出た。

墓地ほどに暗くはないが、薄明かりの中におぼろに見える竹の白さは決して気味の良いものではない。それに、こういう道にはよく蛇がとぐろを巻いていることがある。台湾の理科の教科書には、毒蛇の見分け方や見付けたときの処理の仕方、万一毒蛇に噛まれたときの応急処置の仕方まで載っていた。道の両側の景色

に気を取られないように心掛けながら、教科書の挿絵を思い出そうと努めていた。

一番恐ろしいのは百歩蛇（ひゃっぱだ）というやつで、百歩も歩かないうちに毒が回って死んでしまう。雨傘蛇は毒の弱い方だが、比較的人家の近くに現われるから油断ができない。毒のある蛇は顎に毒を蓄える腺があるので、顎が膨れて頭が三角形になっている。いずれにしろ、毒蛇も人間が怖いから手を出さない限り向こうから噛み付くことは滅多にない。

そんなことを思い起こしながらトポトポと歩いていると、突然足もとの草むらがざわざわと揺れた。すわこそと目を凝らしてみると、長さ二メートルもあろう

という雨傘蛇が首をもたげて、ランランと目を光らせているではないか。まさに目と目が合ってしまった。一瞬、にらみ続けるべきか、目を反らすべきか迷ったが、蛇の方が逃げて行ってくれたので事なきをえた。高鳴る心臓を押えながら、やっと駅にたどり着いたというのに、あら悔し。アイスキャンデーは売り切れていた。悔しさに思わず涙をにじませていたら、とんと

んと肩を叩く者がいる。なんと母ではないか。その後ろに父の姿もあった。私の胸は更に高鳴った。

台北への転居

頂双溪には思い出が尽きない。

何をしたのか知らないが、台湾の人が警察のコンクリートの床に正座して、頭の上に椅子を持ち上げさせられたまま警官に殴られていた。どうしてこんな目にあっているのかと可哀想になり、不思議にも思った。台湾の人は「あいごう、あいごう」と謝っているように見えたが、警官は許さずに殴り続けた。その警官は小学校で机を並べている友達のお父さんだった。

また、こんな思い出もある。小学校で泣いてばかりいた私をことのほか面倒を見て下さった小原先生が結婚するので双溪駅から出立することになった。駅まで小学校、公学校の先生が皆で見送りに行った時の事。公学校の森村先生が衆人環視の中で「おい、おい」と泣き出してしまった。二人とも澳底のキャンプに一緒に行った思い出の人ではあるが、何故そんなに泣くのか、子どもの私には理解できなかった。小原先生はすらりとした優しい先生だった。森村先生はでっぷりと

肥った朗らかな先生だった。森村先生は、小原先生と別れるのが悲しいだけで、あんなに泣いたのではないらしいと気が付いたのは、私自身もっと大人になってからであった。婚期にありながら、一步遅れを取った女心の微妙さは、当時の私に分かるはずもなかった。

一九三四年（昭和九年）四月、父は台北市の永樂公学校に転勤になり、一家は台北市東門町に転居する事になった。母は「明がそろそろ中学校の受験準備をしなければならぬので、いつまでも田舎の小学校というわけにいかない。お父さんは田舎の公学校ならすぐにも校長先生になれるのに、子どもの勉強のために台北に出て来たのよ」と諭してくれた。

その前の年の九月、妹（次女）が生まれたばかりだったので、台北への引越しはなかなか大変だったと思われるが、ほとんど記憶に残っていない。台北に落ち着いた父は早速子どもの写真を撮っておいてくれた。

この年はまた私たちが台湾に渡って満十年に当たっていた。父三十二歳、母三十一歳、長男の私十一歳、長女十歳、次男八歳、次女一歳の一家六人の都会ぐらしが始まった。

（ながさき あきら）にいがた県民教育研究所理事長